

福祉ではたらく



あります、可能性。
必要です、あなたのチカラ。



写真提供 社会福祉法人安積愛育園（表紙も）

はじめに

福祉が社会に

不可欠な仕組みであることは、

多くの人が理解しています。

しかし、そこでどのような仕事が行われているかは意外と知られていません。

人と向きあい、命と向きあって、人生と関わる。

創造的で、刺激的な福祉の仕事は、

経済効率が求められるものとは

一線を画します。

そのため、一般の会社から

福祉業界への転職には、

目に見えないハードルが存在していました。

さまざまな業界から福祉の世界に入り、

活躍する職業人に光を当てること、

多くの人に福祉の仕事に

興味を持ってもらうきっかけとするため、

この本はつくられました。

Contents

P.4

転職者インタビュー

内多勝康
(NHKアナウンサー → 医療型短期入所施設マネジャー)

海野雄幸
(営業職 → 身体障害者入所施設支援員)

柳澤和寿
(新聞記者 → 知的障害者通所施設支援員)

稲富良子
(システムエンジニア → 精神障害者通所施設支援員)

川口大介
(営業販売職 → 知的障害者通所施設支援員)

P.20

障害福祉への転職

ギモンに答えます！

P.23

福祉の仕事には感動がある！
あなたを必要としています

野澤和弘(植草学園大学副学長)

P.24

Message from 福祉事業者

樋口幸雄
(社会福祉法人京都ライフサポート協会理事長)

岩上洋一
(社会福祉法人じりつ理事長)

P.28

アンケート調査から見る①

事業所・転職者のホント

P.30

アンケート調査から見る②

転職者の声



福祉業界では、ながらく

働く人が足りない状況が続いています。

それは、福祉には多くの人に

さまざまな可能性があることも意味します。

この本を通して、

一人でも多くの人に福祉で

働くことの魅力が届くことを願っています。

厚生労働省令和2年度障害者総合福祉推進事業
「潜在的福祉人材に関する調査」検討委員会委員長

岸田 宏司

国立成育医療研究センター もみじの家
ハウスマネジャー

内多 勝康さん(57歳)

- 前職：NHK アナウンサー
- 現在：医療型短期入所施設マネジャー

Profile

1963年 東京都生まれ
1986年 東京大学教育学部卒業後、アナウンサーとしてNHKに入局
2013年 社会福祉士の資格を取得
2016年3月 NHKを退局
2016年4月 国立成育医療研究センターの「もみじの家」ハウスマネジャーに就任

NHKアナウンサーで「生活ほつとモーニング」「首都圏ニュース845」のキャスターなどを務めた内多勝康さんは5年前にNHKを辞めました。現在は医療的ケアの必要な子どもたちを支援する国立成育医療研究センターの「もみじの家」(医療型短期入所施設)のハウスマネジャーをしています。

たんの吸引や人工呼吸器が必要な医療的ケア児は全国に2万人以上いると推定され、10年前に比べ2倍にも増えています。

50歳を過ぎての転身を決断させたものは何だったのか。NHKアナウンサーという華やかなステイジを降りてまで求めた福祉や医療の仕事の魅力とは何なのかを聞きました。

——NHKアナウンサーを辞めて福祉の仕事へ転職したきっかけは何だったのですか？

「クローズアップ現代」という番組で医療的ケアの必要な子どもや家族をテーマにしたことです。キャスターの国谷裕子さんが海外取材に行った際に代役の男性アナウンサー

として担当したのですが、いろいろ提案して番組をつくるのも好きだったものですから、医療的ケアの子どもの企画を提案したのです。

障害福祉には以前から関心があり、川崎市で公務員をしている重い自閉症の明石徹之さんのドキュメンタリー番組をつくったことがきっかけで福祉関係者の知り合いが増えていきました。その中のお一人から医療的ケア児のデイサービスを始めることを聞き、利用者のお母さんたちにインタビューして厳しい現実を知りました。「一日に1回は死んでしまいたくなります」。これほど追いつめられている家族がいることが信じられませんでした。

番組は30分であつという間に終わるのですが、胸の中には問題意識として残っていました。

——50代になって曲がり角を感じる人は多いと思います。学歴社会を勝ち上がり、よい会社に入って、よいポジションへと昇進する。家族ができて、子どもにも手がかからなくなる。そんなときに自分の人生を改めて考えるのだと思います。

アナウンサーの仕事は継続的に問題提起を続けるのが難しいんです。ディレクターがいろいろな企画を持ってきて、それをこなしていくうちにもともと持っていた問題意識がだんだん薄れていく。

「クローズアップ現代」で医療的ケア児のことを取り上げて1年くらいたったころ、デイサービスを立ち上げた福祉経営者と酒を飲んだのですが、国立成育医療研究センターに「もみじの家」という短期入所施設ができるという話を聞きました。とても必要な施設だと、ついでに病院の外からハウスマネジャーを招きたい、と。これはお誘いの話だなと気づいたわけです(笑)

NHKには通算30年いました。もともとはディレクター志望だったので、アナウンサーをやりながらも自分で企画をして番組をつくることもしてきました。しかし、自分が望むポジションにいつづけるのは難しい。いつまでも、自分が、自分が、は組織の中では通用しなくなる。先輩を見てもそうです。そのころ、料理の番組やラジオのDJへと持ち場が変わりました。仕事とやりがい

「医療的ケアを必要とする
子どもたちと家族を支えたい」



#interview

01

を両立させつづけるのはとても難しいのです。

「もみじの家」での仕事がどんな内容か聞けば聞くほどマスコミのなかではできない取り組みだということがわかってきました。定点で一つのテーマを長い期間かけて深掘りできる。もう一度チャレンジしてみようと思いました。

——家族からは反対されませんでしたか？

自分だけの満足度で転職はできないと思っていました。家族から反対されるかと思ったのですが、家内からは拍子抜けするくらい「いいんじゃない」と言われました。長男はすでに社会人になって大阪で勤務していたのですが、自宅に帰ってきた晩に「明日、大事な話がある」と言ったのです。翌朝になって、NHKを辞めることを告げたら、「そりゃあ、よかった」と言うのです。何か私が大変な病気にかかったのではないかと思っていたらしいのです。

転職することで収入がなくなったりやれませんが、3人の子どものう

ち長男は社会人、長女も大学生で、末っ子も大学に入るころだったので、経済的にもある程度見通しが立っていました。

——それにしてもNHKを辞めるといふ決断は勇気がいると思います。障害者のことに興味やモチベーションを持つ要因が自分の中に何かあったのでしょうか？

大学を出るまでは身の回りに障害のある人はほぼいなかったですね。

NHKにアナウンサーとして入局し、初任地が高松放送局でした。新人のアナウンサーの必須の仕事が、地元のボランティア協会のお祭りの司会でした。ボランティア協会の事務局長は脳性まひのある女性で、それからいろんな情報を教えてくれるようになりました。そしてアナウンサーを一生懸命やりながら、番組の提案をするようになりました。

転職する前は、仕事は仕事で肅々とこなし、オフには福祉に関わりと割り切って仕分けし、実際、休みの日にはフードバンクの手伝いもしました。社会福祉士の資格も取ってい



ましたから、「もみじの家」への転職は、仕事で自己実現を目指すことができる、とても魅力的な話だと思いました。

——実際に転職してからはどうでしたか？ 難しい面もあったと思いますが。

マスコミでの仕事しか知らず、医療機関で働くのは初めてで、新人のような気持ちでした。イメージでできなかったから不安もなかったです。のんきな性格、アバウトなモチベー

ションしか持っていないませんでした。

初めの1年は、「おいしそうなのにジンを食べてみたが、苦かった」というのが正直なところです。まったく戦力になりませんでした。ハウスマネジャーというのは事務職で年間計画を立てたり収支計算をするわけですが、事務をやった経験もなくエクセルもうまく使えない。50歳過ぎて役に立たないことを実感させられるわけで、心が折れそうでした。医療の世界では使う用語も違います。それでも1年サイクルで経験してくるとスキルも少しずつ高まって



きます。

もうNHKに戻れるわけもなく、「辞める」という選択肢はありませんでした。「何のために転職したのか」という目的は大きかったですね。社会的な支援が必要な医療的ケア児と家族を支えるために自分はNHKを辞めたのだということですよ。

——福祉の仕事の魅力とは何でしょうか？

経営的には施設は赤字まみれですけど、社会的に必要な仕事ができていると日々実感できることです。利用者や家族に感謝される、それはほめられるということですよ。役だっているというのを実感できます。

——企業からの転職を考えている人たちに何かメッセージをお願いします。

長年勤めてきたキャリアを捨てるのは大変な決断で、勇気がいることです。ただ、定年してからの長い人生に、何か自分でチャレンジできるも

のがあるのであれば、エネルギーがあるうちに飛び込んでほしいと思います。エネルギーも減っていきます。

NHKから飛び出したエネルギーは「ソーシャル・アクション」という言葉です。社会福祉の専門職として、必要な制度がないからサービスを提供できないではなく、自ら世論や行政に働きかけてつくり出す。この言葉が大好きです。「もみじの家」を全国に広めるといふミッションを持っていきます。ソーシャル・アクションを仕事を通じてできる、それが飛び出す推進力になりました。

エンジンがかかるスイッチが誰にもあると思います。スイッチが入る現場を見つけてほしいと思います。

#interview

01

社会福祉法人あしたか太陽の丘
障害者支援施設かぬき学園

海野 雄幸さん(56歳)

- 前職：営業職
- 現在：身体障害者入所施設支援員

Profile

1965年 静岡県生まれ
1983年 静岡県立沼津商業高校を卒業
1983年 ヨコハマタイヤ静岡販売に入社
2015年 ヨコハマタイヤ静岡販売を退社
2015年 社会福祉法人あしたか太陽の丘へ転職、「かぬき学園」に配属

「50代で営業職から障害福祉の道へ」

——転職されたきっかけは何ですか？

20歳で結婚して、早くに子どもができました。30歳で家を買いました。50歳になる前に、3人の子どもが社会に出たこと、家のローンを完済したことで転職を考えはじめました。また、人生を80年と考えたときに「50歳」が人生の一つの分岐点だと感じていました。それまでは、営業職で売上至上主義、結果がすべての世界にいましたが、一生に一度の人生、違う世界に飛び込んで試してみたいと思いました。

——福祉の世界にはもともと興味があったのですか？

実を言うと、まったくありませんでした。ハローワークの担当者があしたか太陽の丘を紹介してくださっ

たのですが、私が施設を知っていたこともあり、話はどんどん進みました。介護も福祉も興味なかったのですが、いったんはお断りしたのですが、半ば強引に、その日のうちに見学に行くことになりました。

——興味のなかった福祉の世界に転職されたのはどうですか？

当時の私は、正直、障害者に対して偏見を持っていました。怖いな、近寄りたくないなと…。そんな私でしたが、法人のある施設を実際に見学してみて、その光景に驚き、感動しました。障害のある人たちが一生懸命に組立作業をしたり、物をつくったりしていました。見た瞬間に、衝撃を受けました。利益を上げることばかり考えてきた前職とはまったく違う、福祉という未知の世界に飛び込んでみたいとすぐに思いました。

#interview



もう一つ、偶然が重なりました。見学先は、前職で訪問したことがある施設でした。私が営業で配ったカレンダーが作業場に飾られ、就職を目指す利用者さんたちの実習予定が書きこまれているのにも感動しました。前職の同業他社からお誘いもいくつかありましたが、自分の直感を信じて転職を決意しました。

——転職することについてご家族は何かおっしゃっていましたか？

妻に相談しました。給料は下がるかもしれないけれど、慣れていない場所で挑戦して人間として成長したいと。妻も私の思いをよく理解してくれ、転職を決意できました。もし、家のローンが残っていたら怒られたと思います。

一番下の25歳の息子は納得できなかったようです。一年ほど、口をき



撮影 上樂博之

いてくれませんでした。私には言わなかったのですが、「お母さんがかわいそう。給料が減った分は僕が働く」と言っていたそうです。妻が私の志を伝えてくれたことで、やっと分かってくれたと感じています。私は黙って頑張っ、背中を見せ続けました。

—— 転職後はどうでしたか？

考えすぎたら、前に進めないと思っています。うまくいく、いかないは二の次です。チャレンジするには当然、失うものもあります。成功する確証もありません。しかし、一生懸命頑張れば、いいことはあるかなと思っっています。実際に、いいこともありました。

はじめは、素人で何もできないので、周りの職員からは「どうせできない」と見られていたと思います。それでも、目の前の仕事を一生懸命やって、利用者に寄り添っていきました。コミュニケーションはもともと得意だったので、その一方で、3年やってだめだったら辞めようとも思っっていました。ミスマッチを覚悟の上で転職したので、3年を一つの区切りとして考えていました。

—— 3年間の区切りはどうなったんですか？

契約職員としての採用でしたが、3年たって正規職員登用の試験を受けられることになりました。これは

チャンスだ、と。ここで正規職員になれなかったら、辞めていたかもしれないですね。当時、53歳だった私を正規職員にしてくれた法人には感謝しています。

正規職員になった後は、もっと勉強したい、もっと頑張ろうという気になりました。猛勉強して、翌年には介護福祉士の試験に合格しました。

—— 現在のお仕事について教えてください。

私が勤めるかぬき学園は、主に身体に障害のある人が暮らす施設です。日常生活の支援が私の業務で、食事、排泄、入浴等の介助をしています。あとは、機能維持の訓練やちょっとしたスポーツ、文化活動も支援しています。何人か通所されている方もいますが、利用者さんのほとんどは施設に入所されています。

—— 仕事について思うことはありますか？

日々、勉強だと思っています。やりがいがありますね。ですが、こういう



仕事は、自分でやりがいを見つけて、自分で勉強して、自分で築き上げていくものだなと思っています。そこは、営業の仕事と通ずるものもありますね。

嫌なことも大変なこともあります。が、そこはうまく乗り越えています。一人で悩むのが一番よくない。私のような「おじさん」にも若い世代の職員がとても協力的です。いろんな

ことを教えてもらって、私もそれを素直に受け入れていきます。そういう雰囲気なので、とてもやりがいがあります。

——まったく違う業界に転職されるにあたって、気を付けたことなどはありますか？

誰からのアドバイスも、素直に受

#interview

02

け入れるようにしています。おじさんとして、そうしなければ物事がうまくいかないと思っています。きちんと受け入れることで、利用者の安心と安全を確保できるというか。年齢に関係なくリスクをとすることは、人間関係をつくる上で気を付けています。

——転職して大変だったことはありますか？

いっぱいあります。夜勤などやったことがなかったので、体力的にきついです。きついときには、手伝ってもらいたいと言える環境をつくることは大事ですね。日ごろから人間関係ができていないと、頼めないです。あとは、他人のおむつや尿パッド交換、口腔ケアをはじめは抵抗がありました。ですが、やっていくうちに自分の考え方ひとつで角度を変えてみれば、そんなことどうってことないし、皆がやっていることです。すぐに慣れました。この仕事は、人のために尽くして、それが商売になる仕事です。こんなにすばらしいことってないと思います。

——これからの目標はありますか？

社会福祉士の資格も取り、できる限り長くこの仕事を続けたいです。今は身体介護など日常生活支援の仕事が主ですが、奥深い福祉の世界でたくさんを経験してみたいと思っています。そのためには、勉強して実力をつけていかなければなりません。最近では、前職の経験を生かして、知的に障害のある人の就労支援や一般企業に就職された利用者さんの相談やアフターフォローなどもしていきたいと考えています。

——転職を悩む方にメッセージをお願いします。

悩んでいるということは、行きたいと思ってる証拠だと思っています。情熱があれば、なんとかなります。実力なんて初めはありませんが、どこかで誰かを見てくれています。悩むことはいいことです。周りや世間体を気にするのも分かりますが、一歩踏み出してみてください。

障害者支援施設職員

柳澤 和寿さん(55歳)

□前職：新聞記者

□現在：知的障害者通所施設支援員

Profile

1965年 東京都生まれ

1991年 明治大学政治経済学部卒業後、全国紙の新聞社に入社
主に地方勤務の取材記者として約20年間で全国各地の取材拠点に赴任

2010年 退職

2011年 福祉系専門学校で1年間学び、社会福祉士の資格を取得

2012年 東京都内の社会福祉法人に入職

「友人がすすめた『やりがい』実感」

——現在、どのような仕事をして
ますか？

福祉の業界に転職して8年余り。東京都内で様々な障害福祉事業を展開する社会福祉法人に在籍しており、現在は就労継続支援B型事業所で働いています。就労継続支援B型は、一般就労が難しいと判断された障害のある人が軽作業などを行う通所施設です。私が勤務する施設には主に知的障害のある利用者が通い、民間企業から請け負っている機械部品や食品の袋詰め、箱詰めなどの作業をしています。

以前は一般就労を目指す人の施設で働いていて、担当した利用者の障害は比較的軽度でした。今は重めの障害を持つ利用者が多く、私自身は様々な支援に挑戦することができ、時間をかけながら一人ひとりに

「じっくりと深く」の支援ができて
いることに、新しいやりがいを実感
しています。

自閉症と診断されたある利用者
は、次の行動をどうするか判断する
のが難しい場面があり、さらに周囲
の人が発する音に過敏で、行動に戸
惑ったときや苦手な音に気づいたと
きにパニックになりがちでした。そ
こで、他者に頼らず行動しやすいよ
う、「きがえ」「しごと」などのプレ
ートを貼ったマグネットボードを活用
するようになりました。作業スペース
も、多くの利用者がいる大きな部屋
から比較的静かな部屋に移ってもら
うなどしたところ、以前より落ち着
いて過ごせるようになりました。

——これまではどんなところで働い
てこられたのですか？



#interview

03



撮影 上樂博之

て転職希望の人、仕事がうまくいかず困っている人など様々でした。さらに、新たに障害者の雇用を検討している企業などからの相談にも応じました。6年間の在職中に担当として約50人の利用者を就労につなげました。就職先も大手から中小企業、官公庁、地方自治体、福祉施設など様々でした。

「もっと準備に時間をかければよかった」「本人の特性を考えると別の職種を勧めればよかった」などと悔やむこともあった一方で、支援を通じて利用者となることができたことの喜びを共有できたことが、私にとっても大きなやりがいとなりました。

—— 転職前はどのような仕事をされていたのですか？

転職するまでの約20年間、全国紙で記者をしていました。異動が頻繁にあり、岩手県の盛岡支局から高知県四万十市の通信部まで全国9カ所に赴任しました。

記者の仕事は子どもものころからの憧れで、やりがいがありました。たくさんの方に会い、話をして情報発

印刷をしたり、完成した商品を配達

したりしていました。日々の利用者との関わりを通じて、障害について、またどのように接していけばよいかな身をもつて知ることができました。在職期間が1年と短かったこともあり、自分が担当して就労につなげられたのは一人だけだったのが残念で

した。

2年目からは都内の自治体が開設している障害者就労支援センターで働きました。知的障害のある利用者だけでなく、精神障害や身体障害などのある人たちの支援もするようになりました。これから一般就労を目指す人もいれば、すでに就労してい

就労移行支援事業所が福祉現場として初めての職場でした。そこは先ほどお話ししたように比較的軽度の知的障害がある人の就労支援をすることが目的でした。利用者は、作業訓練、学習活動、会社見学、体験実習などをします。私が担当した部署では、作業訓練として封筒や名刺の

信し、問題提起すること。また、そのうした取り組みを通してスポットの当たらない人たちをよい方向に導くことなどが主な仕事になります。一方で、記者職の中でも、自分のテーマを持って専門的なジャーナリストとして活動する人もいます。そうした人と自分を比較したとき、「俺って何者なんだろう。広く浅く取材する。何でも屋でしかないのかな」と思っていました。また、異動先の土地について知り、さらに深く取材したいと思ってもすぐに異動になり、一からやり直しになることの繰り返しで、これでいいのかなと感じていました。

もう一つは実家が茨城県にあり、私は長男なので、いずれは親の介護なども考えなくてはいけないと思っています。また、婚約者が関東に住み、都内で働いていたため、何年も前から関東に戻りたいと異動希望を出していましたが、通りませんで

した。関東に戻る見通しが立たず、婚約者に仕事を辞めてもらい二人で地方を転々とすることは厳しかったので、私が仕事を辞めることに決めました。

——なぜ福祉業界への転職を決めたのですか？

当時45歳で、記者から異業種への転職は難しいと思っていました。どうするか考えていたときに思い浮かんだのが一人の幼なじみでした。彼は大手企業を辞め、その後、職を転々としていましたが、社会福祉士の資格を取って障害福祉の仕事に就くことを決めました。一足先にその仕事に就いた彼に「俺も新聞社を辞めようと思ってる」と伝えたら、「お前もこの業界に転職するのはどうだ」と勧められました。福祉業界について彼は、「給料は安いしきついがけれど、やりがいはたっぷりあ

る」と話してくれました。この業界は人手不足で、40代でも入りやすいという現実的な面も踏まえ、私も働こうと思ったのです。

幼なじみと同じように、社会福祉士の資格を取ってから働くことを決め、前職を辞める前に都内の社会福祉の専門学校に申し込みました。専門学校では若い学生たちに交じり、人生の中で一番勉強して充実した日々でした。

私を福祉の業界に誘ってくれた幼なじみは、残念ながら3年前に病気で亡くなりました。その幼なじみの分も頑張っていきたいと思っていました。

——異業種から福祉への転職を考えている人たちにメッセージをお願いします。

必ずしも特殊な業界への転職にはならないと思います。人と接し、そ

の方のニーズに沿ったサービスを提供する。様々な業界で求められる業務と、基本的には同じだと思っています。一方、具体的な接し方やニーズの伝え方、サービスの提供の方法などについては福祉の現場ならではのポイントもあり、対応に苦心することもありますが、それらが大きなやりがいにもなっています。

私の今の職場にも、様々な異業種から転職してきた同僚のスタッフが多く在職しており、共に利用者支援はどうあるべきかを考えながら、日々の業務に励んでいます。あなたも、この新たな「やりがい」にチャレンジしてみませんか。

社会福祉法人 ひらいらミナル
地域活動支援センターこまつがわ

稲富 良子さん(63歳)

- 前職：システムエンジニア
- 現在：精神障害者通所施設支援員

Profile

1957年 東京都生まれ
高校卒業後、プログラマーやシステムエンジニアとしてコンピューター業界で働く
2000年の介護保険法施行直前に介護ヘルパーとなり高齢者福祉の世界へ
2014年 相談支援センターくらふとに入職
2019年 地域活動支援センターこまつがわセンター長に就任、現在に至る

「誰にとっても、暮らしやすい街をつくるために」

「誰にとっても暮らしやすい地域づくり」という運営法人の理念のもと、障害のある人もそうでない人も利用できる事業所のセンター長として、最前線で地域との関係づくりに奮闘している稲富さん。福祉の世界の中でも特に障害分野は伸びしろが大きいのが魅力という稲富さんに、仕事のおもしろさや課題の乗り越え方を聞きました。

——現在の仕事の内容を教えてください。

「こまつがわ」は障害者が地域社会の中で交流を持ちながら生活していくためのサービスを提供する「地域活動支援センターI型」になります。居住支援や就労支援、居場所の提供、地域活動など様々な事業を展開していますが、中心は基本相談（生活相談）です。

この相談事業の管轄は精神障害なんですが、障害を持っていない地域の方の相談も必要があれば受けています。不登校気味の高校生が相談にくることもありました。私の役割は基本相談と全体的な管理業務です。

センターとして、もう一つ力を入れているのは「ピアサポーター」の育成事業です。精神障害分野のピアサポーターは、障害のある人生に直面し、同じ立場や課題を経験してきたことを生かして仲間として支える人を指します。先進的な地域では、ピアサポーターが退院間近の利用者さんのところに行って、退院後の生活について話したり、一緒に買い物に出たりしています。当事業所の常勤職員にも一人、「ピア」の人がいて、私たちには取り切れない相談内容を当事者ならではの視点で聞き取ってくれるので助かっています。ピアサポーターをたくさん輩出して町中に



増やしていきたいし、活躍の場を開拓していきたいです。

——障害福祉の分野で働くようになったのは50歳を過ぎてからだそうですね。

ここにくる前は高齢者介護に関わっていました。それより前はまっ



撮影 高見知香

たく違う仕事をしていました。

高校卒業後、最初に勤めた企業でコンピューター室に配属になり、そこで勉強させてもらい、今でいうIT関係のプログラマーやSEの仕事をしていました。ソフトウェア開発会社やフリーランスで働いたりして15、16年は続けました。しかし、コンピューター業界は日進月歩。産休でちょっと休むとついていけなくなり、3人目の子どもができたあたりで諦めました。

仕事を休んでいたときに、ママ友から「ヘルパーやらない？」と誘われたのが介護職の始まりです。介護保険制度がもうすぐ始まるころでした。ホームヘルパーとして経験を重ね、その後、訪問介護事業所のサービス提供責任者として働くようになりました。高齢者介護は10年以上やっています。

——障害分野に移ったきっかけは？

私がサービス提供責任者として担当していた利用者さんに障害のある息子さんがいました。その息子さんを支援していたのが、当事業所の立ち上げ準備をしていた法人が運営する「相談支援センターくらふと」でした。私は母親である利用者さんの責任者として、息子さんの支援責任者と会うようになり、障害のある人へ、こういう支援があるのだと初めて知りました。障害分野に興味があり、そこから計画相談（障害福祉サービス等の利用計画の作成）の専門員の勉強を始め、くらふとに入職しました。

——高齢者介護とは違うおもしろさがあったのですか。

高齢者介護は、その方の身体や生活の状態をいかに落とさずに長く保っていかれるかという部分が強い。それに比べると、障害のある人は変

#interview

04



#interview 04

化があり、伸びしろがいっぱいあるなと思います。あとは、よくも悪くも、障害のある人のほうがこちらの対応に対してストレートに反応が返ってくる。大変ですが、やりがいがある。それに同じ障害名でも一人ひとりの違いが大きく、本当に個別ケアが必要だと思いました。高齢者がみんな一緒ということはありませんが、個別性に魅力を感じました。

もう一つは、高齢者の介護保険制度はまず枠があり、要介護度に応じて点数が決まっています、その中でサービスをどう組み合わせるかを考えなければならず、必要であってもそれ以上増やせない、いらぬのにたくさんあることもあり、矛盾を感じていました。障害のほうは、その人に必要なものを必要な分だけ支給してもらおうという訴え、必要なくなったらお返しする。その人に合わせたオーダーメイドで支援を考えていけるのは魅力的でした。

——仕事で難しさを感じることは？

利用者さんと接する上での難しさは感じませんが、障害について、地域の方々にどう理解してもらい、地域とのつながりをどうつくるかが課題です。見て分かる障害、例えば車いすを利用している人や白杖を使っている人には地域の人が手を貸すことがあると思うのですが、精神障害は怖いと思われたり、障害が関係する事件が起きると「（この利用者も）同じじゃないの」という目で見られたりすることもあります。

理解を得るために、地域の方と一緒にできるイベントを企画するなどしています。センター長として、障害があってもなくても、誰にとっても暮らしやすい街づくりを目指しています。

——転職を考えている方にメッセージがありましたらお願いします。

この精神障害福祉の分野は、まだ歴史も浅く、制度として固まり切ったものではないので、これからつけていける、変えていける可能性が大きいと思います。利用者さんに伸びしろがあるように、この仕事自体に伸びしろがある。そこにおもしろさ、やりがいがあるのではないのでしょうか。またご家族や周囲に精神を病む方がいるとき、仕事で学んだ経験や知識がいろいろなかたちで生かせると思います。

社会福祉法人 京都ライフサポート協会
多機能型しょうがい福祉サービス事業所 若杉

川口大介さん(48歳)

- 前職：営業販売職
- 現在：知的障害者通所施設支援員

Profile

1972年 大阪市生まれ
1996年 大学卒業後、眼鏡販売チェーンに営業販売職として就職
2015年 退職、社会福祉法人京都ライフサポート協会に入職
2018年 多機能型しょうがい福祉サービス事業所「若杉」に配属
2020年 介護福祉士国家資格取得

「家族と向きあう、時間ができた」

——現在、どのような仕事をしていきますか？

生活介護や就労支援を行う京都市内の通所施設「若杉」で、5名の利用者がいらっしゃるクラスの担当をしています。あわせて、施設全体の行事を計画し、運営する業務もしています。夏祭りや日帰りの旅行、避難訓練、救急救命講習などです。昨年はコロナ禍の影響で規模の縮小や延期、中止などの行事もありましたが、支援の質向上を目指し、利用者の皆様やそのご家族の皆様に季節を感じ、楽しんでもらえるように、日々取り組んでいます。

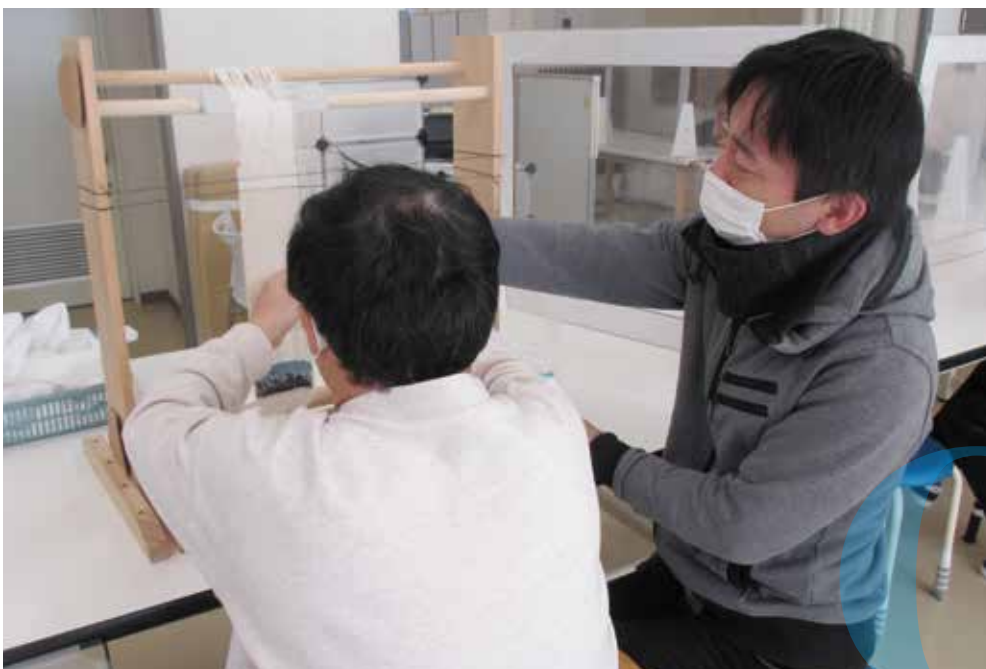
——これまでどんな福祉現場で働いてこられたのですか？

入職後すぐ、京都府木津川市の入

所施設で障害のある人の日中活動を補助する仕事に配属され、そこで2年半働きました。最初の1年間は本

当にゼロからのスタートで、私より若い先輩職員にたくさん仕事を教えてもらいました。それだけでなく、通勤電車内で勤務内容の復習や準備、シミュレーションをする毎日でした。重度知的障害の方が主な利用者で、様々な行動障害のある方もいます。日々支援する中で、利用者が激しい感情表現をされたり、精神的に不安定な状態になられたりすることもありました。すべてが初めての経験で戸惑うこともありましたが、周囲に支えられ、そうした行動には理由があることを学びました。

——転職前はどのような仕事をなさっていたのですか？



#interview

05

眼鏡店で営業をしていました。もともと人と話すのが得意なタイプではなかったのですが、お客様とやりとりしながら困りごとを探していき、求めている以上のものを提供できたときには、やはりやりがいを感じました。営業職でお客様のために考えて販売をしていたことは、今の仕事にも非常に役に立っていると思っています。利用者さんのことを常に考えて仕事する必要がありますし、人と人の関係性であるという部分に共通点がありますね。一方で、店舗勤務のため土日関係なく働いていて、日付が変わってから帰宅したり、店に泊まって翌日そのまま勤務したりといったこともありました。

——**転職を考えられたきっかけは何ですか？**

最も大きな理由は、子どもや家庭のことです。長男、次男ともに発達障害があり、子どもや家庭のためにより多くの時間を使うためには販売業の働き方には無理がありました。19年半働いてきて一区切り、という気持ちもありましたし、眼鏡業界全

体の動向や勤めていた会社の業績自体が悪化していたこともあり、転職の決断はすんなりできたと思います。妻も同じ眼鏡店での営業職をしていて、私の生活についてはよく理解していました。また、私より先に妻が転職していたこともあり、家族の反対もまったくありませんでした。

——**なぜ福祉業界への転職を決めたのですか？**

土日祝が休みという条件で、あらゆる業界・業種で幅広く探していました。すでに40歳を超えていて面接してもらえないところは限られていましたし、条件で合わない部分もありました。福祉に対して興味を持ちました。福祉に對して興味を持ったのは、子どもが発達障害の診断を受けてからです。転職を考えるにあたり、福祉業界もよいのではないかと思ひ、インターネットで調べていました。

そんなときに、京都ライフサポート協会のウェブサイトを見たんです。他業種から移ってきた方々のインタビュー記事が載っていて、「他の業界からでも福祉業界に入ってい

いんやな」と初めて思いました。子どもの将来のことを考えたときに、福祉のことを学びながら働くことができるのはいいなと感じました。また、実際に長男のことで福祉サービスを受けている立場なので、逆にその恩返しができると思いました。そのように考えて求人に応募したのですが、選考途中であっても職場見学や仕事の体験をさせてもらえ、具体的なイメージが湧きました。福祉業界に興味を持ってすぐでしたし、まったくの未経験でしたので非常にありがたかったです。

——**転職の前と後で変化したことはありますか？**

やはり生活面になりますね。夏場であれば明るいうちに家に帰る事ができますし、休日もしっかり取れるので、家族と充実した時間を過ごすことができている。前職では、眼鏡の価格低下や業界内の競争激化が進む中でお店のお客様も年々減っていて、将来に日々不安を感じながら仕事をしていました。反対に障害福祉はニーズがなくなることはありません



ませんし、安定していると感じます。転職したことで家族のことも仕事のことも前向きにとらえることができている点は、本当によかったなと思っけています。今では妻も障害者福祉施設で働いています。土日のどちらかは必ず家族がそろいますね。キャンプなどにも出かけられるようになりました。子どもたちも一緒に

お風呂に入れるようになって、とても喜んでくれたことを覚えています。

——異業種から福祉への転職を考えている方にメッセージをお願いします。

なにか一つの理由で福祉業界に転

職するのは難しいと思います。ですが、もし複数の理由があるのであれば、ぜひ挑戦してほしいと思います。私も、子どものことがなければ福祉業界への転職を考えることはおそれなかったと思いますが、今では決断して本当によかったなと感じています。

目の前の相手が何に困っているの

か、それを解決するためにどうしたらいいのか。そうした前職での経験は私自身いまの職場でも役に立っていますが、同じように他業種の経験が生かせる場面は障害福祉の世界にはたくさんあると実感しています。福祉を専門に学んでこられた先輩方、後輩の皆さん、他業種を経験された様々な年代の方々が、一つの職場で同じ利用者の方々の支援について考え続けるという環境で働くことができます。もちろん、私は魅力だと思いません。もちろん、命を直接預かる障害福祉の仕事は常に緊張感がありますが、その分、大きなやりがいと責任を感じますし、すべてを日々意識しながら従事していきたいと思っています。



撮影 上樂博之

#interview

05

障害福祉への転職 ギモンに答えます！

勤務体制、専門性、待遇…。障害福祉の仕事で気になるあれこれに答えます。

Question

01

夜勤や不規則なシフトなど、**勤務時間はきついイメージ**があります。実際はどうなんですか？



Answer

事業所によって様々ですが、障害のある人の生活全般を支えるグループホームや入所施設には、夜勤や土日祝日の勤務などもあります。もちろん、休日はしっかり保障されます。平日の休みを満喫している人もいます。また、はじめのうちは夜勤をさせないなどの工夫もされています。一方、通所施設の仕事は平日日中の勤務が主になります。家庭の事情などで土日に休みたい場合は、応募する事業所の勤務体系も見てください。

Question

02

障害福祉分野には、実際には
どのような仕事がありますか？



Answer

主に障害のある人の暮らしや活動・労働などを支援したり、相談にのったりする仕事です。ただし、福祉事業所を運営するためには、事務、渉外・営業、栄養管理・調理、運転など、障害のある人を間接的に支える人も必要です。直接的な介護・支援の仕事以外にも、幅広い能力が必要とされています。

Question

03

どのような雇用形態が一般的
なのでしょう？

Answer

事業所によって方針は様々ですが、事業経営が比較的安定していることや人材不足のため、積極的に正職員として採用するところもたくさんあります。また、有期雇用から正職員に登用された人も含め、前職での経験を生かして正職員として活躍している人も少なくありません。

Question

04

待遇面、特に給与が下がる
のではないかと心配です。

Answer

転職して下がる人もいますが、特に若い世代では転職後に上がるケースも少なくありません。資格を取得することで手当ての支給も期待できます。また、どの地域でもニーズがあり、障害福祉サービスの費用は国や自治体が負担しているため景気の波に影響されにくく、経営が比較的安定しているという特徴もあります。国では福祉職員の給与の改善に向けた取り組みを進めています。

Question

05

転職時に資格は評価されますか？
転職後に **働きながら資格** は取れますか？

Answer

たとえば、食事の提供には献立作成や調理が必要となるため栄養士・調理師の資格が評価されるといったことはあります。利用者の送迎には普通自動車や大型の運転免許が必要となります。そのほかにもスポーツ関係や事務関係など、さまざまな資格・特技を生かせる場があります。福祉関係の資格もちろん強みとなります。一方で、入職後に福祉の勉強をして資格を取ることもできます。そのために各種の支援を行う事業所もあります。

Question

06

40代、50代の未経験者でも
採用されるのでしょうか。

Answer

福祉業界では豊富な人生経験を持つ人を求めているところも多く、実際に40代・50代で他の業界から転職して活躍している人もたくさんいます。福祉という新しい世界で、あなたの経験を生かしてみませんか？

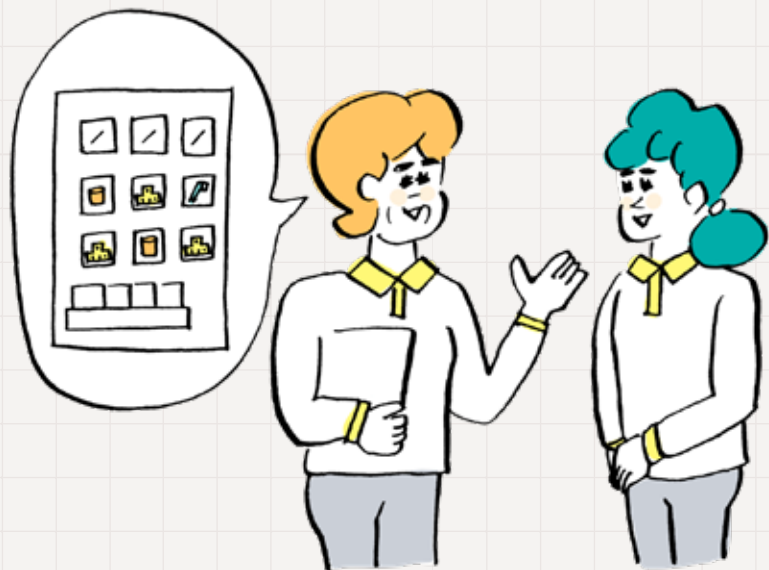
Question

07

障害福祉は、**未経験者は入りづらい**ようなイメージがあります。きちんと仕事を教えてもらえるのか心配です。

Answer

よりよい支援をするために、チームワークは不可欠だと考えられています。このため、それぞれの障害のある人への支援を検討する会議が機会ごとに設けられたり、管理者などによるバックアップ体制がつけられたりしています。福祉とは関係ない学校・学部出身者も多く、未経験者への研修やアドバイスも問題なく行われます。



福祉の仕事には感動がある！ あなたを必要としています

車いすを押したり、食事の介助をしたりすることだけが福祉の仕事ではありません。

障害者福祉は2005年に「障害者自立支援法」ができてから、ほぼ毎年10%前後も予算が伸びてきました。この15年で約4倍にも増えました。それにともなって、働くことを軸とした福祉サービス、住み慣れた町でのグループホーム、障害児の預かりなどが特に伸びています。

就労を支援するサービスでは、障害者ができる商品の開発、販路の開拓、ホームページなどをつかったPR、企業や役所との交渉など、これまでの福祉にはない仕事が必要とされるようになりました。

農業を障害者の仕事に取り入れた「ノウフク（農福）連携」は国も進めています。地場産業を継承する障害者施設、伝統的な建築物を再利用して障害者が働くレストランや美術館を運営する法人もあります。

知的障害者や精神障害者の芸術作品は海外でも高い評価を得ており、2018年には障害者文化芸術活動推進法が制定され、各地で障害者の芸術活動が活発化しています。

施設や事業所を運営する社会福祉法人やNPOでは事務作業の省力化や合理化を進めるため、情報技術やAI（人工知能）の導入が必要とされています。

大学の福祉学部や専門学校では、こうした仕事について十分には教えられていません。障害者の特性や支援の方法については学んでも、社会参加や就労を軸とした現在の障害福祉に必要な社会での実践力や人脈などは身につきません。そのため福祉現場では、企業からの転職者が培ってきた技術や情報を生かして活躍している例がたくさんあります。

もちろん、従来の障害者支援にある福祉の奥深さに心を打たれる転職者もたくさんいます。ひとりでは日常生活ができない重度の障害者、ごまかしたり取り繕ったりすることが苦手な自閉症の人などにはむき出しの弱さ、生きにくさがあります。そうした障害者の支援には、厳しい競争社会の中で疲弊した神経を癒してくれるものを感じる人も多く、福祉の魅力になっています。

これからはAIが人間の仕事の多くを代替するようになるといわれています。障害者支援の現場には絶対にAIにはできない仕事がたくさんあります。感動、やすらぎ、安心、生きがい…そうした充足感を与えてくれるものがあります。

「3K」と揶揄されるようなイメージとはまったく違う世界が今の障害福祉にはあります。転職を考えているみなさん、一度でも障害福祉の世界をのぞき、体験してみませんか。

植草学園大学副学長 野澤和弘

知的障害者が 「ありのままに、当たり前」暮らせるように

社会福祉法人京都ライフサポート協会 理事長

樋口 幸雄さん

京都ライフサポート協会は、知的障害のある人の暮らしを支える事業をさまざまな形で行っていきます。入職後の環境や学びについて、理事長の樋口幸雄さんに聞きました。

福祉施設・事業所にとって、人材はその質を左右する生命線です。多くの利用者の365日を支えていくことは、えり抜きの職員だけで実現できることではありません。夢や目標を語る人がいて、それを形にする人がいて、それを毎日こつこつ継続する人がいます。それぞれの立場の人が自分の仕事に熱意をもち、互いの立場を尊重しあう職場風土が、安定的な事業運営を実現します。

福祉の仕事にもいろいろあります。障害福祉に限ってもさまざまな内容の仕事がありますが（表参照）、どれも働きながら社会に貢献できることが大きな魅力です。

障害のある人たちのために生涯にわたって必要なサービスを一つひとつ創造していくためには、知識だけでなく柔軟な発想やまっさらな視点から本質を見つめることも必要です。多様な価値観を受け入れ、互い

に力を合わせて福祉の枠・あり方を広げていくことができる人材を歓迎しています。福祉を専門に学んできた方はもちろん、さまざまな学部・学科から学生・社会人経験者が採用されています。

資格が取得できる環境を

資格取得を目指す中で主体的に得られた学びは、仕事での心の支えや自信となります。当法人には、無資格で入職した職員も多くいます。そのため、資格取得や研鑽のための補助制度を充実させ、研修の日程確保を支援しています。入職後3～5年うちの国家資格取得率は80%を超え、10年を迎える職員では100%の取得率です。資格取得後は、資格手当が給与に加算され、専門性を尊重する職場風土を大切にしています。

障害のある人の日常をサポートする業務に役立つ資格には、いろいろなものがあります。国家資格である「社会福祉士」や「介護福祉士」などのほか、「介護職員初任者研修（旧ヘルパー2級）」「介護支援専門員（ケアマネジャー）」といった資格を取

得している人もいます。

様々な学びのかたち

障害福祉の現場では、個別の状況に応じた対応が求められるため、職務を通じた研修制度が充実しています。「OJT（On the Job Training）」と呼んでいます。

当法人は、2002年に「横手通り43番地『庵』」という、最重度の知的障害者や著しい強度行動障害のある人のための生活施設を開設しました。現行制度を最大限に活用し、生活の質を高めるために「ありのままに、当たり前」という視点でとらえ直しながら、入所施設の最大の課題である閉鎖性・集団性の解消に取り組んできました。

ここでの居住支援における工夫は、介護を受けているという「受け身の生活」を最小化することで利用者一人ひとりから能動的な生活の営みを引き出すことにあります。それは利用者と共に編み出すものであり、支援者の専門性が養われるものだと考えています。

重い障害のある人たちの暮らしの支援を経験することは、すべての障



障害福祉の仕事

種類	内容	福祉サービスの名前
「暮らし」を支える仕事	暮らしの場は、心とからだを休め、リラックスした自分の時間を過ごす大切な場所です。「暮らし」を支えていくことが、日中の活動やはたらく意欲の充実にもつながります。	居宅介護、短期入所、日中一時支援、移動支援、行動援護、重度訪問介護、施設入所支援、共同生活援助
発達を支える仕事	障害のある子どもたちにも福祉の支援が必要です。自宅や学校で支援をします。子どもの家族を支えることにもつながります。	児童発達支援センター、児童発達支援事業、医療型発達支援事業、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援
	福祉施設に入所している子どもたちの支援をします。	障害児入所施設、医療型障害児入所施設
	自宅で暮らしている子どもたちの家にホームヘルパー等が訪問したり、家族がいないときの支援をしたりします。	居宅介護、短期入所
「日中の活動」や「はたらく」を支える仕事	日中活動の支援や「はたらく」を実現するための支援は、障害のある人の社会参加と自己実現を図るための大切なサービスです。日中活動の支援は、障害の状況や本人の希望に応じて、創作活動から生産活動まで様々なものがあります。	生活介護事業、自立訓練、就労継続支援 A 型、就労継続支援 B 型、就労移行支援、就労定着支援
ニーズをつなぐ仕事	福祉サービスを利用したくても「どのサービスを選べばいいかわからない」という人はたくさんいます。希望を聞き、その人のニーズに合わせて福祉サービスにつないでいきます。つないだ後も定期的に利用状況などのモニタリングを行います。	特定相談支援、障害児相談支援、一般相談支援、障害者相談支援、地域定着支援、就業・生活支援センター

※日本知的障害者福祉協会『伝えよう！あなたの支援を～知的障がい福祉の仕事の魅力～』をもとに作成

害福祉サービス支援の基礎となります。『庵』での暮らしの支援を入職後3～5年経験してもらうことは、当法人における人材育成の極めて重要な場面となっています。ここでの居住支援を通して、職員が「障害」に対する肯定的な意識が育ち、この仕事の意味や役割に対する理解が深ま

ります。このように障害のある人の生活の全体像を把握したうえで、多様な福祉サービスを一人ひとりに合った形にコーディネートできる職員の育成を目指しています。

*

私たちが目標として掲げる「質を追求する福祉」とは、「障害のある

人が、ありのままに当たり前に暮らす環境」をつくっていくこと。そのためのチャレンジの継続だと考えます。人間一人ひとりの多様性にしっかりと目を向け、個々のニーズに対応できる環境やサービスをつくっていくことが私たちの使命です。

「ふくし」とは「ふだんの 暮らしの しあわせ」

社会福祉法人じりつ 理事長

岩上 洋一さん

埼玉県東部で主に精神障害のある人たちの生活支援や通所事業などを展開する社会福祉法人じりつ。理事長の岩上洋一さんに、新たに障害福祉分野を志す皆さんへのメッセージを聞きました。

日本福祉大学教授の原田正樹さんは、「ふくし」の意味を「ふだんの暮らしの しあわせ」と伝えていきます。福祉は、自分とは関係のない他人事ではありません。誰もが自分らしさを大切にしてきて、ごく当たり前に生活できる社会をつくっていくことです。そんな「ふだんの 暮らしの しあわせ」に一緒に携わってみませんか。

高さでなく深さに生きる

皆さんは今までのどのような価値を大切にしてきましたか。世の中はずいぶんと多様性を認める社会へと変わってきました。そうは言っても、一流といわれる大学を出て、名前の知られた企業に勤め、お金に余裕のある生活を送ることを望んでいる人も少なくありません。あるいは、自分はともかく、わが子にはそうあつ

てほしいと望むのかもしれない。

しかし、皆さんもお気づきのよう地位・名誉・お金といった「高さ」があるからといって、幸せになれるものではありません。福祉の世界には「高さ」ではなく「人間の深さ」があります。現代福祉の父といわれる糸賀一雄さんは「『この子らに世の光を』でなく『この子らを世の光に』』という言葉を残しています。手助けを必要としている人は「施される人」ではなく、社会の中で主体的に輝く存在であるべきだという理念は、障害福祉の世界の基本的な考え方になっていきます。こうした理念を大切にしながら障害のある一人ひとりと関わりをもつことは、人間の奥深さ、そして尊さを学ぶことだと思います。

悩みながらスキルアップ

私の法人では、新しく入職した職員に数年先輩の職員を教育担当者として配置します。配属先でオリエンテーションを終えた後は2週間程度、現場の仕事を体験します。さらに1カ月間にわたり、法人内のすべての事業所で研修を行います。これ

は法人全体の事業内容を学ぶだけでなく、職員や職場の雰囲気にも慣れてもらうためです。

配属先では、上司と相談しながら仕事の取り組み方などの個人目標を設定します。その後は、上司と毎月モニタリングします。各職場では、障害者の個別支援にかかわるミーティングが毎日朝と夕方であり、加えて事業内容や個別支援に関する定例の会議が月1回あります。入職後、孤立したり、一人で困りごとを抱えこんだりしないよう、チームで支援する体制をつくっています。ただし、対人サービスは、悩むこと、考えること、相談することもスキルアップの上でとても重要なことです。希望者は、内部に加えて外部のスーパービジョンが利用できます。その他、法人全体の研修（アセスメント、虐待防止、意思決定支援、実践研究）を通して研鑽します。福祉の現場でやりがいを感じながら仕事ができれば、一人ひとりにあつたスキルアッププログラムを作成します。

実務経験を積んで指定の研修を受講すると相談支援専門員やサービス管理責任者になることや、養成校に



IT業界から転職して、障害者の就労支援にやりがいを感じている職員も。

通って社会福祉士、精神保健福祉士等の資格を取得することも可能です。

福祉の仕事をする上で大切なこと

福祉の仕事する上で大切なことは、人間性、社会性、そして専門性です。専門性は、これから学んでいきましょう。それでは、人間性と社会性はどうでしょう。清廉潔白であれということではありません。むしろ、皆さんの人生経験が生かせる仕事なのです。

さて、ここで質問です。皆さんは、人生の中で誰かに助けてもらった経験はありますか。助けてくれた相手の態度、言葉、そのときの自分の気持ちを考えてみてください。

「真剣に聴いてくれた」「一緒に泣いてくれた」「気持ちを知ってくれた」等々。きっと、特別に何かをしてもらったというよりも気持ちをわかってくれてほっとしたのではないのでしょうか。

福祉の分野では「傾聴」「共感」といいますが、まずは、自分がしてもらってよかったことからスタート

していきましょう。もちろん、「傾聴」「共感」は万能ではなく、例えば発達障害などで「情報の混乱」が生じている人には、適切な「答え」も必要になります。まあ、これは応用編です。

心のグラブとリスベクト

私は、主に精神障害のある人を支援してきました。精神障害とは、何らかの脳の器質的変化あるいは機能的障害が起こり、精神症状、身体症状などが見られる状態です。風邪をひいて熱が出る、アレルギーで湿疹が出るのと同じで、脳内で生物学的な変化が起こって、一連の症状が引き起こされているものです。精神障害といっても、その症状や特性は多岐にわたります。

精神障害のあるAさんに皆さん求職者へのメッセージを頼みました。

「僕の病気は、統合失調症ですが、悩み事が深みにはまる感じですが、皆さんも悩み事で食欲がなくなったり、眠れなくなったりすることがあると思うんですが、それがずっと続いちゃうんです。例えて言うなら素手でキャッチボールをしている感じ

かな。心のグラブがないので、相手の言葉や反応が僕の心を直撃しちゃうんです。でもね、薬を飲むこと、仲間ができること、皆さんに気持ちをわかってもらうことを続けていくと、なんか自分は大丈夫だと思えてくるんです。そんな時、僕には心のグラブができているんだと思います。」

「皆さんは、スマホや携帯電話を使っているでしょ。ちょっと前は、想像つかなかったですよ。精神障害も同じじゃないですか。メンタルヘルス、精神疾患、精神障害、もう、身近なことだと思います。」

私は、人と関わる仕事をする上で最も大切なこと、ここでは、Aさんの心のグラブになるためにですが、それは、相手をリスベクトすることだと思っています。

皆さんの考えや経験を「ふだんのからしの しあわせ」をつくるために生かしてください。

*1994年、滋賀県に知的障害児らの支援施設「近江学園」を創設したほか、職員の育成や福祉の制度づくりに力を尽くした。

事業所のアンケート結果

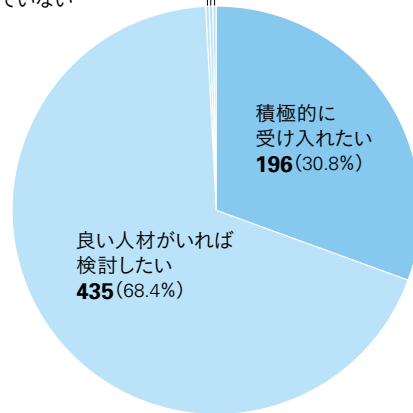
事業所・転職者のホント

アンケート調査から見る①

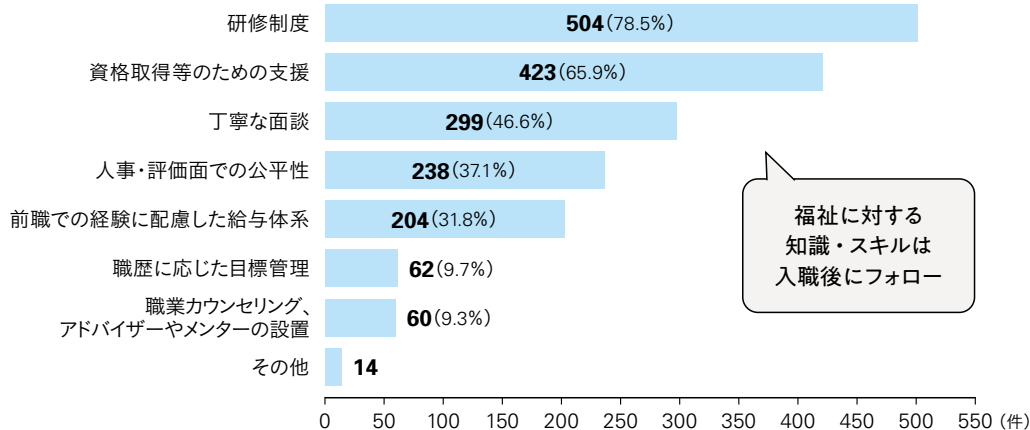
Q 企業などからの「転職者」の受け入れについて、あなたはどのように考えていますか？

ほぼすべての事業所が転職者の採用に肯定的

考えていない 1 (0.2%)
あまり考えていない 2 (0.3%)
その他 2 (0.3%)



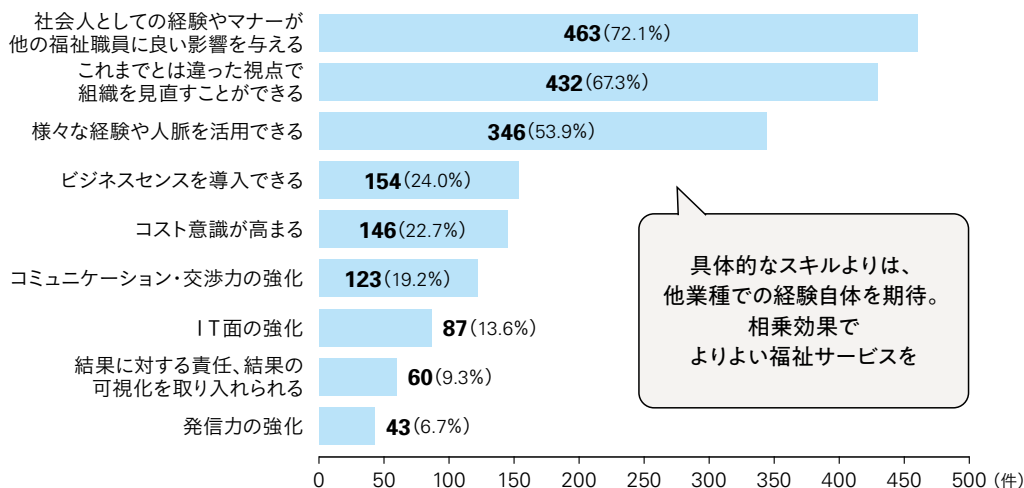
Q 企業などからの「転職者」に対して、法人としてどのような配慮を行っていますか？（複数回答可）



福祉に対する知識・スキルは入職後にフォロー

福祉以外の分野からの転職について、福祉事業所と転職者にアンケート調査を行いました。この結果から、福祉事業所・転職者の思いを見てみましょう。

Q 企業などからの「転職者」を採用するメリットはどのようなものがあるとお考えですか？（複数回答可）



具体的なスキルよりは、他業種での経験自体を期待。相乗効果でよりよい福祉サービスを

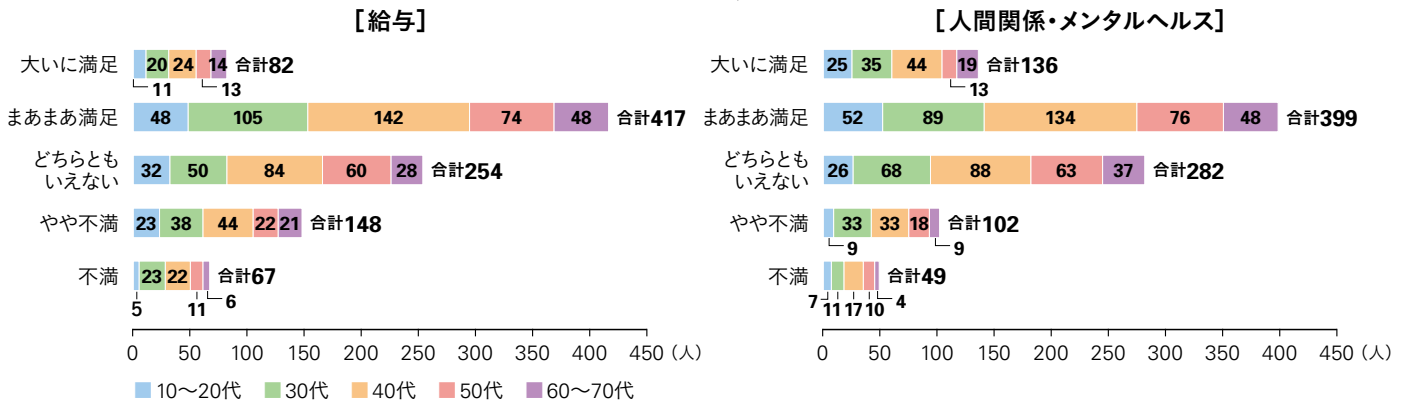
(注釈)
調査は2020年8月18日～9月30日に実施(期限後の回答も11月11日分まで受け付けた)。事業所向けのアンケートは質問紙またはウェブ上のフォームで、転職者にはウェブ上のフォームで回答を依頼し、以下のとおり回収した。

●事業所向けアンケート 642件
(質問紙:441件、ウェブ:201件)
●転職者向けアンケート 968件(ウェブ:968件)

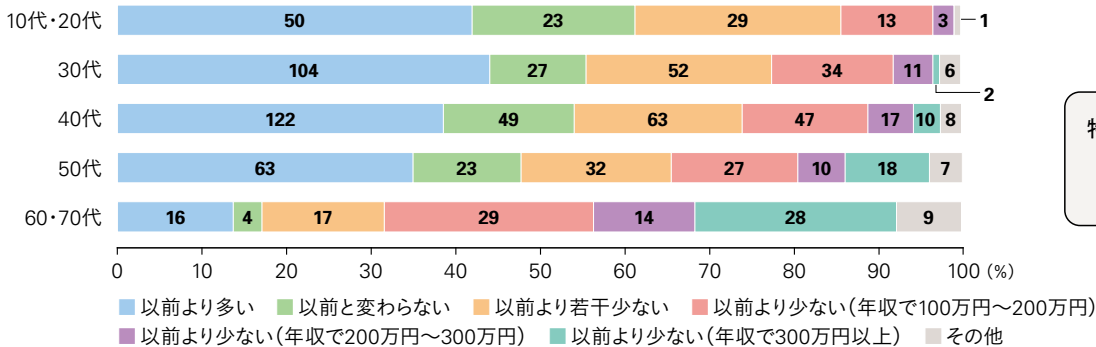
転職者のアンケート結果

Q 現在の仕事の満足度を教えてください。

職場の体質などによっては不満を感じる場合があるものの現在の仕事への満足度は全体的に高い

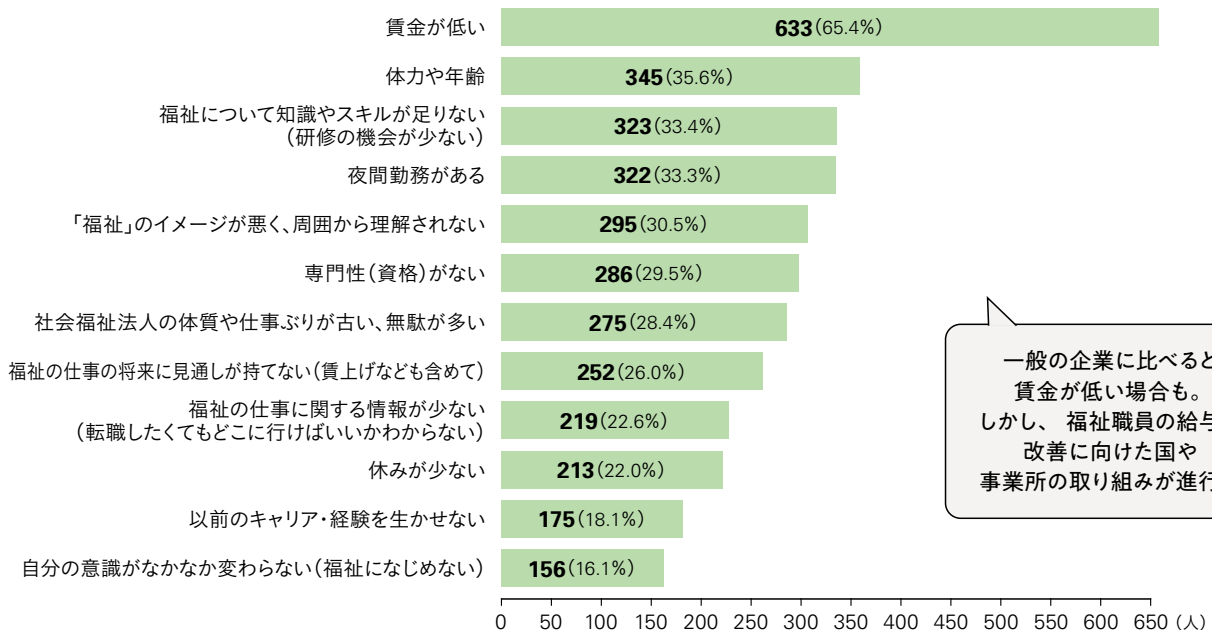


Q 以前の仕事と転職直後比べて報酬(年収)はどのくらい違いますか？



特に若い世代ほど、年収が増えた人が多い

Q 福祉への転職の支障(壁)は何だと思いますか？



一般の企業に比べると賃金が低い場合も。しかし、福祉職員の給与の改善に向けた国や事業所の取り組みが進行中

転職者に聞いた
よくなかった
こと



利用者やその家族の生活に
深く関わるため、
精神的にきついことがある。

(40代女性・事務員)

高年齢での新しい職種への転職だったため、
覚えるのが大変。体力的にも精神的にももっと
若いうちに転職しておけばよかった。

(50代女性・支援員)

資格や経験などの下地がない
ところからの転職だったので、
日々学ばなくてはならない。

(30代男性・支援員)

障害に対する理解ができていなかったため、
福祉の考え方（障害者理解）に
なじむまで1年ほどかかった。頭の思考と
気持ちが一致せず苦しかった。支援の奥深さ、
やりがいを理解する前に、自分には
向いていないとあきらめてしまう人はいらと思う。

(60代女性・相談支援専門員)

アンケート調査から見る②

転職者の声

転職して「よかったこと」「よくなかったこと」
についてもご回答いただきました。
もちろん事業所や職場・職種などによっても違いがありますが、
いくつかご紹介します。

安定はしたが、仕事量と
収入の比率が合っていない。

(30代男性・支援員)

利用者さんたちからの意思表示が、
悪意はなくてもたまにこちらを傷つけてくる
形だったりすることがあり、
生傷がたえない。

(40代女性・支援員)

給料が安い。
組織の考え方が古い。効率面で
一般企業との差がある。

(40代男性・支援員)

思っていたよりも自分の持っている資格を
いかす機会が少ない。
また業務の種類が多く、もともと専門職として
働いていたため、とまどうことが多い。

(20代女性・事務員兼支援員)

成果が数値として見えづらい
ところがある。事務をする時間が
なかなか取れない。

(30代女性・支援員)

転職者に聞いた
よかった
こと



月に数度、変則勤務業務もあるが、比較的安定した勤務時間で規則正しい生活が送れる。

(30代男性・支援員)

小さい子どもが2人いるが、子どもが熱を出したときに快くお休みをもらえる。

(30代女性・支援員)

残業が非常に少ない。

(30代男性・事務員)

仕事の内容は大変だが、収入が増えて生活に余裕ができた。

(40代男性・支援員)

自分の地元で貢献でき、自分が支援した利用者が仕事や目標を達成して満足されている姿を見ると、こちらもうれしくなる。

(30代男性・支援員)

あいさつしてもらえ、声を掛けてもらえる。ちょっとしたことが幸せに感じる。

(40代女性・支援員)

一人あたりが負担する業務・責務が分散されており、業務に無理がない。チームで支援するので一人ひとりの意識が高い。

(30代男性・支援員)

コロナ禍でも安定していて、将来的にもなくなる仕事ではないことが入職してわかった。

(20代男性・支援員)

職場の人や雰囲気がよい。障害を持っている人と関わることで、勉強にもなるし、人が温かく感じる。

(30代女性・事務員)

利用者さんが笑顔で穏やかに過ごされている姿を見ると、やっていてよかった、またがんばろうと思う。

(50代男性・支援員)

本書は、下記ウェブサイトでもご覧いただけます。



一般社団法人スローコミュニケーション
<https://slow-communication.jp/info/2609/>
(左の QR コードからアクセスできます。)

本書は厚生労働省令和 2 年度障害者総合福祉推進事業費補助金「潜在的福祉人材に関する調査」により作成されました。調査事業の実施および本書作成にあたり、公益財団法人日本知的障害者福祉協会ほか数多くの事業者・団体の皆さまにご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

障害福祉業界への転職BOOK 福祉ではたらく

2021 年 3 月 31 日発行

編 著 一般社団法人スローコミュニケーション
発 行 者 野澤和弘
発 行 所 一般社団法人スローコミュニケーション
<https://slow-communication.jp/>
info@slow-communication.jp

デザイン 有限会社エムクリエイト

イラスト あべさん

印刷製本 株式会社興陽館
